

指標名: 医療機器関連圧迫創傷の発生率

背景

医療機器によって発生する損傷は治療においては合併症の一つとして扱われるべきもので、決して仕方のないことではなく予測して防がなければいけないものである。医療機器は有効な使い方によって効果的な治療やケアを進める事ができるが同時に効果を追求するあまりに生じる弊害も見逃せない。当病棟は急性呼吸不全や慢性呼吸不全により酸素療法や非侵襲的陽圧換気療法などを使用している患者が多く、皮膚の菲薄化に加え呼吸不全の進行による低栄養や病的骨突出の患者も少なくない。これらは医療機器関連圧迫創傷発生の要因となり、効果的な治療が困難となり患者の生活の質を著しく低下させる。患者個々に合った適切な看護介入を実施し医療機器関連圧迫創傷の発生を予防していく必要があると考え質指標として取り組んだ。

データの定義

分子: 医療機器関連圧迫創傷の発生人数
 分母: 1ヶ月の実入院患者数

2018年度のデータ

発生件数: 8件 発生率0.4%

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
B5	医原性	1	0	0	0	2	0	0	1	2	0	0	2	8
	患者実数	156	158	171	148	155	148	165	161	132	169	182	165	1910
	医原性発生率	0.6	0.0	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	0.6	1.5	0.0	0.0	1.2	0.4

参考データ

2017年度:発生件数23件 平均1.2%

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
B5	医原性	0	2	1	3	3	0	3	2	2	3	2	2	23
	患者実数	143	154	155	176	164	147	153	170	169	187	176	185	1979
	医原性発生率	0.0	1.3	0.6	1.7	1.8	0.0	2.0	1.2	1.2	1.6	1.1	1.1	1.2

評価

今年度は酸素カヌーや酸素マスク、非侵襲的陽圧換気圧迫部、ネーザルハイフロー圧迫部にクッション材を貼り付けする事を徹底し、スタッフへの教育に力を入れた。グループ会でメンバーにクッション材を巻くことの協力を呼びかけ病棟スタッフにも医療機器関連圧迫創傷予防のためにクッション材を巻く事が必要であると定期的に声かけを行った。病棟には十分な量のクッション材が常にあったため、酸素機器の倉庫に切ったクッション材を置き、必要な時にすぐに使用できるように準備を行った事も発生現象につながったと考える。また医療機器の圧迫部の皮膚の観察を毎日行えるように観察項目の入力も徹底して行った。クッション材を巻くだけでなく観察し除圧する事で定期的に患者の皮膚を見るようになった。更に意識レベルがクリアな患者や酸素機器の扱いに慣れている患者には耳介に褥瘡が発生するリスクを説明し患者自身でも除圧を行ってもらうように指導を実施。その結果、酸素機器をきつくしめすぎないように患者自身が意識したり、付け外しし除圧していた事も減少につながったのではないかと考える。また非侵襲的陽圧換気の使用患者は昨年度に比べ少なかったのも減少した要因の一つと考える。非侵襲的陽圧換気とネーザルハイフロー使用患者は毎日タオルで顔ふきを行いなるべく余分な皮脂を取り除き、清潔な状態を保ち発生の予防につながったと考える。しかし非侵襲的陽圧換気についてはリークやずれを回避するためにマスクの固定がきつくされ発生した事例もあった。今後の課題として非侵襲的陽圧換気マスクの固定を見直しスタッフへの指導が必要と考える。非侵襲的陽圧換気やネーザルハイフローは患者の状態が急変し急遽使う事が多いため装着直後はクッション材が貼り付けされず、観察がされていない事もあった。短時間でも褥瘡が発生してしまう事をスタッフと共有し、予防に更に力を入れていきたい。これらの活動を行った結果2017年度は医療機器関連圧迫創傷発生率1.3%であったが2018年度は0.4%であり、目標値の1.2%を下回る事ができた。

参考文献

ベストプラクティス 医療関連機器圧迫創傷の予防と管理 2016年5月25日 第1版第1刷発行P6

